「公印省略」

25病防第12号の11
平成26年1月20日

各関係機関団体の長
各病害虫防除員　　殿

福岡県病害虫防除所長

平成２５年度病害虫発生予報第１１号（２月）について

このことについて、病害虫発生予報第１１号を発表したので送付します。

予報第11号

２月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量（現況）	発生量（２月の発生予報）	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	少 やや少	少 やや少	並 並
冬春ナス	すすかび病	少	少	並
冬春トマト	灰色かび病	並	やや少	やや少
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病	やや少 やや少	少 少	少 少
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類 （ナ　ス） （トマト）	少 ― （少） （並）	少 やや少 （―） （―）	少 並 （―） （―）

＜予想される向こう１か月の天候（平成26年1月11日～平成26年２月10日）＞

平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう１か月の気温は平年より低いでしょう。降水量は平年より少ないでしょう。日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、１週間目は平年より低く、２週間目以降は平年並でしょう。

向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　　温	４０	３０	３０
降 水 量	４０	３０	３０
日照時間	３０	４０	３０

（福岡管区気象台　平成26年1月10日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（　）書きは、（＋）は発生を助長する要因、（－）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【野菜：冬春イチゴ】

１　うどんこ病

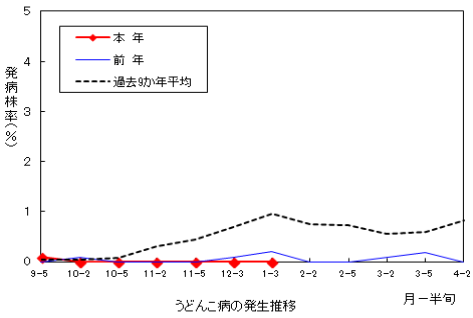
（１）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

（２）予報の根拠

ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
発病株率 0%（過去９か年平均 1.0%、前年 0.2%）

イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（－）。



うどんこ病の発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　早期発見に努め、下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ　ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ　農薬の使用及び散布等にあたっては、ｐ６の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

２　ハダニ類

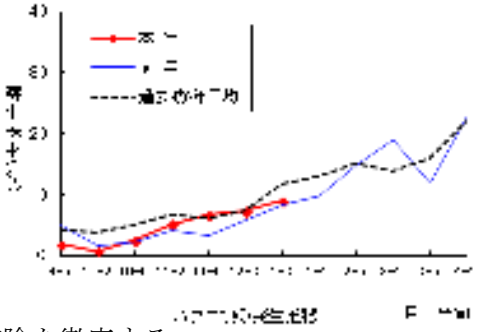
（１）予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

（２）予報の根拠

ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。
寄生株率 9.0%（過去９か年平均 11.6%、前年 8.2%）

イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（±）。



（３）防除上注意すべき事項

ア　多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

イ　防除は摘葉後に行うと効果的である。また、摘葉した葉や除去した雑草は、ハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

ウ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ　天敵を利用する場合は、天敵類への影響が大きい合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

オ　薬剤抵抗性が発達しないように、薬剤のみに頼らず総合防除に努める。

【野菜：冬春ナス】

１　すすかび病

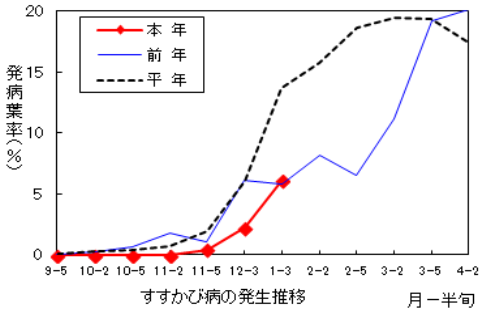
（１）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

（２）予報の根拠

ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
発病葉率 6.1%（平年 13.7%、前年 5.8%）

イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（－）。



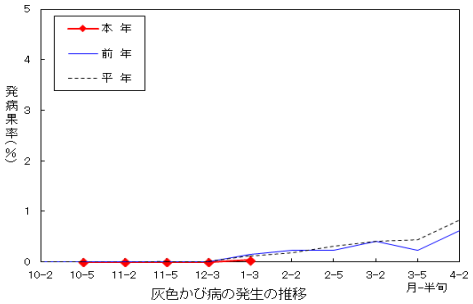
すすかび病の発生推移

（３）防除上注意すべき事項
ア　病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。
イ　発病葉はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
ウ　肥料切れや成り込みによる樹勢の衰えは発生を助長するので、適正な栽培管理を行う。
エ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜：冬春トマト】

１　灰色かび病

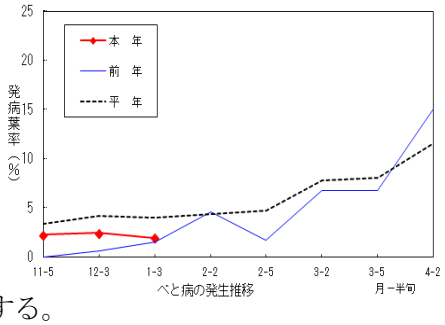
（１）予報の内容
発生量：平年・前年よりやや少
（２）予報の根拠
ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発病果率 0.0%（平年 0.1%、前年 0.1%）
イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（－）。
（３）防除上注意すべき事項
ア　病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。
イ　発病果は除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
ウ　開花後の萎れた花弁は、伝染源となるので取り除く。



【野菜：冬春キュウリ】

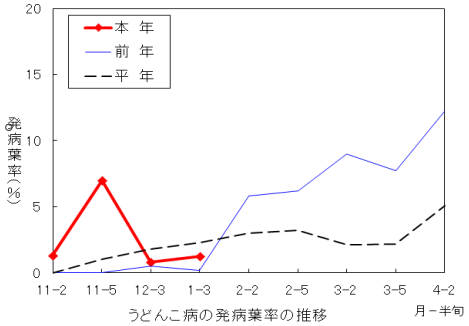
１　べと病

（１）予報の内容
発生量：平年・前年より少
（２）予報の根拠
ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。
発病葉率 2.0%（平年 4.0%、前年 1.6%）
イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（－）。
（３）防除上注意すべき事項
ア　病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。
イ　肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。
ウ　スワルスキーカブリダニを導入している場合は、薬剤の選定に注意する。



２　うどんこ病

（１）予報の内容
発生量：平年・前年より少
（２）予報の根拠
ア　１月３半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。
発病葉率 1.3%（平年 2.3%、前年 0.2%）
イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（－）。
（３）防除上注意すべき事項
ア　罹病葉はできる限り除去するとともに、葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。
イ　窒素肥料の多用は本病の発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



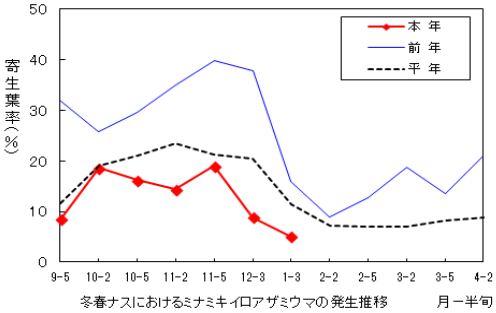
ウ　スワルスキーカブリダニを導入している場合は、薬剤の選定に注意する。
エ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜共通】

１　ミナミキイロアザミウマ

（１）予報の内容
　　発生量：平年・前年より少

（２）予報の根拠
ア　１月３半旬調査の結果、ナスでの発生量は平年より少なかった（－）。
　　ナス寄生葉率　　5.1%（平年 11.4%、前年 16.0%）
　　ナス発生ほ場率 55.6%（平年 79.7%、前年　100%）
イ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（±）。

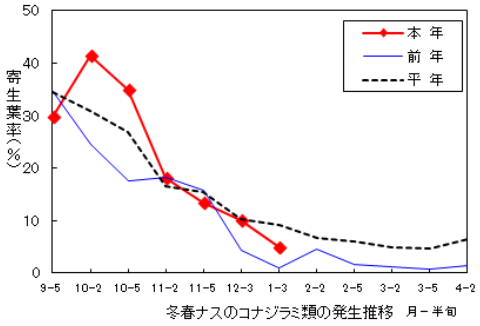


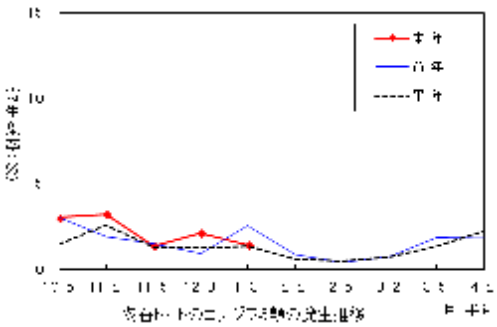
（３）防除上注意すべき事項
ア　葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように散布する。
　　また、多発した場合は、約１週間後にもう一度薬剤散布を行う。
イ　ほ場内の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。
ウ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
エ　薬剤抵抗性が発達しないように、薬剤のみに頼らず総合防除に努める。
　　なお、天敵を利用する場合は、薬剤の選定に留意する。

２　コナジラミ類

（１）予報の内容
　　発生量：平年よりやや少、前年並

（２）予報の根拠
ア　１月３半旬調査の結果、発生量は冬春ナスでは平年より少なく、冬春トマトでは平年並であった（－）。
　　ナス寄生葉率　5.1%（平年 9.2%、前年 1.0%）
　　トマト寄生葉率 1.4%（平年 1.3%、前年 3.0%）





ウ　向こう１か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている（±）。

（３）防除上注意すべき事項
ア　ほ場内の雑草の除去を徹底し、害虫の生息と増殖源を絶つ。
イ　幼虫や蛹が寄生している下位葉は、できる限り除去する。
ウ　葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。
エ　施設栽培では、成虫のハウス外への飛散防止のため、0.4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。
オ　同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
カ　トマト黄化葉巻病（TYLCV）の罹病株は、早期に抜き取りほ場外へ持ち出す。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 （現況）	発生量 （２月の発生予報）		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病	やや少	やや少	やや少	・罹病果は見つけ次第除去する。 ・また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
冬春ナス 灰色かび病	やや少	並	並	・罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外へ処分する。
冬春トマト 葉かび病	少	少	並	・肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。 ・抵抗性品種を栽培しているほ場でも、葉かび病の発生に注意する。
冬春キュウリ 灰色かび病 褐斑病	やや少 並	少 やや少	少 やや多	・予防散布に努める。 ・罹病葉や罹病果は早めに除去し、ほ場外へ処分する。 ・初期防除を徹底する。
冬キャベツ 黒腐病 菌核病 コナガ	 やや多 やや少 やや少	 やや多 やや少 やや少	 やや多 少 並	 ・予防散布に努める。 ・発病株は除去する。 ・若齢幼虫期に防除する。
冬レタス 灰色かび病 菌核病 腐敗病	 少 少 少	 少 少 少	 少 並 並	 ・発病株は、抜き取り処分後、直ちに薬剤散布する。 ・灰色かび病との同時防除を行う。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ　http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/
電子メール　kfok0301@sp.jppn.ne.jp

農薬の安全･適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・有用昆虫・河川等に対する配慮について、ご指導をお願いします。

１　農薬ラベル確認の徹底

（適用作物･使用量や濃度･使用時期･総使用回数･有用生物〈みつばち等への影響〉）

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

（例：スミチオン水和剤 40 は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる）

２　散布前における情報提供の実施

（散布区域に近接するほ場、住宅地、養蜂等の関係者、他）

３　散布時には近隣作物や住宅地等周辺への飛散防止を徹底

・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意。

・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用。

・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意。

４　散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を３回洗浄

５　防除履歴の正確な記帳

・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳。

６　空容器の処分

・空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。
また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。